

コラム

明治大学平和教育登戸研究所資料館を見学して

小林寿太郎

秋の気配が深くなった11月下旬、明治大学生田校舎にある「明治大学平和教育登戸研究所資料館」を見学した。学園祭の最中でキャンパスは音楽や学生の歓声でにぎやかだったが、かつてここには陸軍登戸研究所があり、その遺構が今もたくさん残されている。資料館はかつての建物1棟を当時のままに復元しており、室内に展示コーナーを設置して、活動内容を紹介している。

陸軍登戸研究所は陸軍のなかでも最高機密に属する秘密戦、諜報・謀略活動についての研究・開発を担い、風船爆弾、細菌兵器の製造、通貨偽造などを大々的、かつ秘密裏に実施していた。国家権力による他国通貨の偽造は国際法違反なので、終戦時に研究所の設備、資料などは大急ぎで破壊、隠匿され、その実態は長い間、謎に包まれていた。

しかし20年程前から市民、教員、高校生などの平和活動の一環としてその実態が解明されてきた。こうした活動には長野県の赤穂高校、神奈川県の方政第二高校の高校生の役割が特に顕著で、この資料館がオープンしたのもそうした活動の延長にある。資料館の展示はどれも興味深いが、私が特に関心を持ったのは通貨偽造工作についてである。

日中戦争が本格化する前夜の1935年、中国政府はイギリス、アメリカの支援のもとに、通貨改革を実施して、全国統一通貨である法幣を制定した。1937年には日中戦争が全面化するが、日本軍の持ち込む紙幣、軍票などは、法幣よりも通用力で劣っており、日本は中国との通貨戦争では当初から敗北していた。こうした状況を打開するため、1939年に法幣の偽造工作が決定された。

大量の偽造法幣を中国に持ち込み、インフレを誘発して、中国経済を破壊しようといのであるが、副次的目的として偽造法幣で物資を調達するという姑息なことも考えていた。登戸研究所の一角には巨大な偽造法幣印刷工場が出現して、ドイツ製の高性能印刷機が設置された。

1940年には本物そっくりの偽造法幣が完成、1日で10万枚が印刷されたというが、中国の通貨流通量の10%ぐらいを発行する予定だった。

しかし偽造紙幣による中国経済破壊は成功しなかった。

中国政府自身が戦費調達のために法幣を過大に発行したため、ハイパーインフレが起きてしまい、通貨流通に占める偽造法幣は10%どころか1%にもならず、その影響は微々たるものだった。一方、偽造法幣による物資調達の方はかなりの成果があったというが、経済的实力以上の戦争を遂行するために敵国の通貨を偽造して物資を調達するというのは何とも侘しい。

さて、自民党の安倍晋三総裁はデフレ脱却の金融政策として、日銀券の無制限発行をとっているが、無制限の通貨供給は間違いなく経済を破壊する。

そんなことはかつての陸軍でさえ知っていたことなのに、自国の経済をわざわざ破壊するとは何を考えているのだろうか。